



## 平田 京子 研究室

### Kyoko Hirata Lab.

Profile	Works
1984 日本女子大学家政学部住居学科卒業	学位 博士(学術)
1990 日本女子大学大学院家政学研究科住居学専攻修了	主な著書
株式会社大林組勤務、尚絅学院短期大学専任講師・助教を経て	「長く暮らすためのマンションの選び方・育て方」
1998 日本女子大学 家政学部住居学科着任	「地震リスク評価とリスクコミュニケーション」
2004 The University of British Columbia 客員助教授 (Canada)	「『社会に貢献する』という生き方」
2013 教授	日本女子大学と災害支援」 ドメス出版

## 「生活に密着して、人に寄り添う、市民目線で発想」

平田研究室では、防災、コミュニティ、共助、住情報、住居学をキーワードとし、災害発生時の避難所運営、地域や家庭における防災、建築主のための住まいづくり支援をテーマとする研究・活動を行っています。



## 大地震時の大規模避難所の運営モデルと住民共助の構築

大地震時に東京では数百万人が暮らす「みんなの家」となる避難所。平田研究室では、避難所の運営モデルをずっと住民や地域と共に研究してきました。特に地域住民の自主運営の実現や住民の共助体制の構築をめざして活動しています。これまで地元である文京区の長会や住民の皆さんと一緒に、避難所運営スキルの向上のためのワークショップや、避難所運営方法の検討、共助を実現するためのワークショップ、アンケートやヒアリング調査を実施してきました。さらに今年度は、茨城県K市での避難所運営モデル構築の研究・実践活動を行っています。産学協同型の研究や、行政との連携、学生参画型など、いろいろな試みを行い、避難所が被災した住民の命を安全に守る場となること、お互い様のコミュニティをつくる場となることをめざして研究を進めています。大規模な避難所では住民の自主運営だけでは運営しにくいこと、行政の適切な意思決定と施設管理者による臨機応変な現場の統括、NPOなどが支援に入れるような避難所運営の方法、避難所運営のためのチェックリストの作成等を行いました。



## 子ども向け防災啓発

文京区主催の防災体験ができる区民向けのイベント、「防災フェスタ」に平田研究室で出展しました。研究室では、企業や自治体が出す展示ブースに出展し、小さな子連れの方々を対象に防災について触れてもらうブースを企画、また研究室の大槌調査の紹介や活動紹介などを行いました。プロジェクトは平田研究室の院生が中心となって企画し、研究室の4・3年生、石川研究室の4年生が参加しました。ブースでは、小さな子連れの家族向けに学生が作成した防災パンフレットを配布し、保護者の方に防災啓発を行いました。また、小さなお子さんには、学生が小さな子ども向けの防災紙芝居を披露しました。また軸組模型を使い、住宅の構造の安全性について学べる体験コーナーでは、実際に軸組模型に触ってもらい、模型の組立に夢中になる親子が多くいました。8月の暑い中でも、多くの区民が来場し、また子連れで参加する方が多く、防災に関心が高まっていることが感じられました。(府中 ひかる)

## 東日本大震災被災地 岩手県大槌町調査

3回に渡り東日本大震災の被災地である岩手県大槌町を訪れ、デイサービス施設でヒアリング調査と、震災から6年経過した被災地の現状を調査しました。大槌町は岩手県上閉伊郡に所在し、沿岸部にあり、津波で甚大な被害を受けました。盛り土がされ、以前は土埃が舞っていた道路も綺麗に舗装されました。整然と区分けされた土地では地鎮祭を行う家族もみられ、復興へ向け一歩一歩踏み出しています。仮設住宅に住む方は昨年より減少し、自宅再建をしたり、修理して暮らす方が多く見受けられました。しかし未だ仮設住宅に住む方もいらっしゃるのが現状です。また、住宅を取り戻しても震災前のように暮らすことは困難で、町の中心部への人口流出により、知り合いがいない中、寂しい思いをしつつ生活する方も多くいらっしゃいました。住宅を取り戻すことが復興ではなく、震災前と同じような生活を送ることができるようになること、そこで初めて復興と言えるのだと強く感じました。(阿部 一咲子)

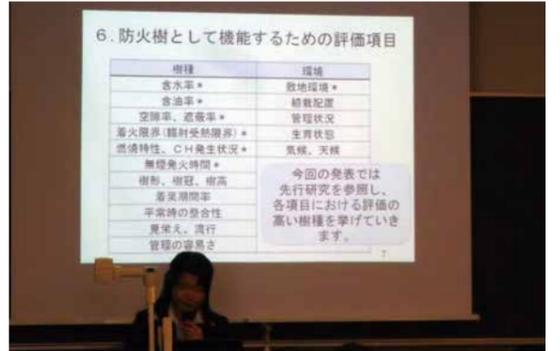
## 主な卒業論文・修士論文

- 卒業論文：「日本女子大学妊産婦・乳児救護所開設に向けて -収容計画と開設キットの開発およびその検証-」妊産婦・乳児救護所での学生参画型運営をめざして」天野朋実、大石真里江 2020年度  
 「竣工年代別にみる集合住宅リノベーションの傾向分析」齋藤紅寧 2020年度  
 「茨城県K市防災スポーツ施設への適用を目指した大規模避難所運営モデルの構築-避難所運営マニュアルの改善とNPOの支援可能性の考察-」安藤春菜 盛一佳菜子 2018年度  
 修士論文：「東日本大震災被災者の近隣交流の変化と自宅再建における交流の位置づけ-岩手県大槌町の分散居住した被災高齢女性に着目して-」阿部 一咲子 2017年度  
 「乳幼児をかかえる世帯・妊産婦世帯を対象とした災害時の防災力向上に関する研究-文京区を対象とした防災啓発の試みと求められる共助-」府中 ひかる 2016年度

研究室の雰囲気を表す一言：真面目にコツコツ

## 平田研究室

平田研究室では毎月1回、他の研究室と合同で卒業論文・制作、修士論文・制作の成果を発表する「月例会」を学生主体で開催しています。研究室のゼミ生は皆参加し、その月の研究活動の成果をパワーポイントにまとめ、発表します。発表後の質疑応答では、先生方からご質問やご指摘を頂きます。このように研究の完成を大きな目的とし、毎月の月例会を目下の目標に研究に取り組んでいます。毎月発表することで研究に対し理解を深め、客観的に進捗を把握できます。また、他の学生の研究を知り、同級生や先輩の発表の優れた点を学ぶことで自分の研究に活かしたり、発表スキルを高めることが可能です。また、月例会の最も大きな意義は、先生方に定期的に成果を見て頂き、細やかなご指導を頂くことでより研究を深める点にあります。(阿部 一咲子)



## 2021年度の卒業論文・卒業制作



日本女子大学妊産婦・乳児救護所の開設計画  
 -受付計画と備蓄物資の取り出しに着目した開設キットの開発-  
 岩元 菜津子 卒業論文

日本女子大学は妊産婦と0歳児を受け入れる文京区の妊産婦・乳児救護所に指定されており、災害時において多くの避難者が見込まれているが具体的にどのような運営されるのかはまだ決定していない。本研究では救護所のタイムラインを事前に想定した上で、受付方法と備蓄物資を中心に見直し、先行研究を受けて文京区が更新した開設キット案の改良と追加を計画した。また、運営者の人数算定では現在想定されている職員11名がベストであることを明らかにした。

震災時にみんなの家が果たした役割-東日本大震災の事例を中心とした分析-



酒本 瞳 卒業論文  
 大地震が起きた際、地域コミュニティ復興のために貢献してきた「みんなの家」が果たした役割について研究した。みんなの家は、東日本大震災にてリビングらしい場や地域の産業発展に寄与するような場を提供したりすることで住民から評価されたことが明らかになった。住民に受け入れられた背景には建築までの経緯が関係しており、東日本大震災では建築家が住民に耳を傾ける機会を積極的に設けたこと、熊本地震では公的な熊本型Dの初期整備として組み込まれたことで、集会所としてではなくみんなの家として浸透した。



住宅の長寿命化に向けた大学生および親世代に対する住意識調査  
 -若い世代に向けた良質な住宅循環の啓発をめざして-  
 眞野 詩織 卒業論文

環境問題の深刻化から住宅の長寿命化が重視されている。良質な住宅の循環に向けた啓発を探るため、学生の住意識を明らかにした。学生と親世代に住意識のアンケート調査を実施し、現実感の違いに着目して比較を行った。学生は金銭面の現実感を与えられ、新築から中古へ住宅志向が傾く人がいることや住宅選択において理想的な環境意識をもちながらも住宅価格の安さに引っ張られ、節約を優先する人がいることが分かった。学生が抱く節約志向を環境志向へ転換する啓発が環境保護のための良質な住宅循環の鍵になる。



受容する水空間 -神田川における営みの再興-

田川 幸 卒業制作  
 明治期は都市に水空間が残され、人々の日常の一部であった。昭和期に水質悪化などにより水空間は減少したが、近年では、水空間を再興する動きが高まっている。それは人々の非日常の空間である。明治期の水空間は、誰のものでもない空間として存在し、どんな行為も受容する。人々は、自分の目的に適した居場所を探す。一方で、最近の水空間は、誰かの空間として存在し、行為を限定する。本設計では、かつての水空間で行われていた「自分の目的に適する場所を探し、居場所をとる」という人間の営みが再興される水空間を提案する。



集い、溜まり、流れ、～まちの防犯性を高める店舗と住宅～

山本 有紗 卒業制作  
 日本では世界的に見て治安の良い国と言われており、国内で発生した全体の犯罪発生件数も年々減少しているが、犯罪がなくならない以上安全な生活が送れない。商業施設は不特定多数の人間が集まり散っていくため犯罪が起こりやすい箇所である。特に商店街は商業施設の中でも人の流れが激しいため、より防犯に配慮した設計が必要となる。商店街の防犯の脆弱性を建築的に解決する方法はないのかと考え、人々の暮らしや行動の中で自然と見守り合えるような商店街の設計をめざした。